

# 子ども同士の言語的コミュニケーションにおける一考察

## —会話の自然発生的過程の検討—

山本 弥栄子

A Study in Children's Peer Talk. : The Natural Process for Picking Up Language from Their Peers

Yaeko Yamamoto

### 要約

本論は、就学前までの幼児がいかに同輩間の会話を成立し発展させていくかを研究の主眼とし、山本(2003)の先行研究で取り扱ったデータをもとに量的分析、質的分析を行い再検討するものである。

子ども同士の会話を分析するにあたり、保育所在籍幼児(2歳-6歳)計52名のうち幼児ペアを30組抽出し、ある観察場面において対座した2児の会話内容を記録し、その転記内容に基づいて会話分析を行った。量的分析にあたって、子どもの発話内容を①会話成立に至らないまでも相互作用に向かう過程にある発話である「準相互作用発話」、②相互交流を行う意図がみられる発話である「相互作用発話」の二種類に分類し統計処理を行った。その結果、4歳以降に何らかの相互作用的な言語活動が為されることが示唆された。質的分析では、幼児間の会話が発生する2歳から4歳までを対象として分析した結果、両者が眼前の事物を介さずに同一のイメージを共有することができ、同一経験をしていない相手に対しても会話が成立し始めるのは、4歳後半児同士のペアであった。

キーワード： 乳幼児の社会的行動 コミュニケーション 子ども同士の会話

2006年9月29日受理(理論)

### 問題

3歳頃になると、子どもたちは子ども同士で共同の活動を楽しむようになり、ことばを用いて相互交渉を行うようになる。ことばを用いた相互交渉すなわち「会話」は、相互的コミュニケーションの役割を果たし、社会的な相互行為であるがゆえに、「自己」と話し相手という「他者」を結びつけるものである。

人間の発達過程において、生後2年間は母子相互作用を基礎とした伝達行動が為される。既に乳児期後半で同輩の存在に気づき、クローバー保育が展開される。1歳半頃には自分の意図やつもりが明確になってきて自我が誕生し、2歳頃には話し言葉を用いて対人関係

が広がり始める。さらに遊具の貸し借りや、いざこざ<sup>(1)</sup>の仲裁など子ども同士がやりとりする中で、自らのことばを用いて一所懸命に相手と関わろうとしている姿が見られ始める。自己の要求を即座に理解し受け止めてくれる大人とは異なり、幼児間においては相互の意思疎通がスムーズに図れないことがあり、子ども同士による会話は困難を要する。特に乳幼児が生活している保育所では、子ども同士でのやりとりがよく見られるが、幼児間の会話を観察してみると、その場面一つ一つにおいて相手と交流しようとする社会的な意図やその努力が垣間見られる。衝突やいざこざ<sup>(1)</sup>、意見の不一致が生じたとしても、相互理解に基づいた共

(1) いざこざ

松永(2006)によれば、いざこざとは「人と人との欲求や要求のぶつかり合いや意見の食い違いなどの社会的衝突」であり、ケンカと同義である。倉持(2003)は、「子どもたちの間で、お互いの意志の食い違いの結果生じるもめごと」であり、「子どもたちの相互交渉では頻繁に生じているできごと」と定義している。

日本における発達心理学の研究領域においては、幼児の「いざこざ」研究は1980年代に入ってから存在し、無藤・内田(1982)や木下・朝生・斎藤(1986)や倉持(1992)らが中心に研究を進めてきた。

通の意思決定へ向かおうとしているのである。

その意味において、同輩間で相互意思伝達を可能にし、かつ円滑に行えるようになるまでの子ども同士の会話の成立過程は、筆者にとっては大変興味深い発達の一側面である。

### (1) 会話とは何か一定義の検討一

そもそも発達研究の視座において、「会話」とはどう定義づけられているのであろうか。

「言語伝達」の真の目的は、聞き手に話し手の意向を伝えることにあるが、一般的に「会話」とは、二人または数人が互いに話したり聞いたりして共通の話を進めること、とされる。

communication は、人間が互いに意思・感情・思考を伝達し合うことであり、conversation は談話を交わしたり対談するなど、共につきあい話し合うことを意味する。また、dialogue は主に意見交換などの一対一の問答や対話を意味し、talk は雑談など気楽な会話である。子ども同士の会話は Garvey (1984) が述べるように talk の意味合いが強く、ある意向を聞き手に伝えるためだけに発話を行っているのではないと感ぜられる。つまり、他者の存在により一人では解決できないことを互いに共有し、考えていく場であると考えられる。話し手の発話と聞き手の発話の方向性があり、その方向性が交わり相互行為が生じることによって会話が成立する。

好井 (1999) は、会話を (1) 優れて意味のある社会的行為、(2) 二者以上の人間がその場そのときの現在で、共働し、想像する日常的な現実機構作業、(3) 人々が自分の生活を生きていくうえで回避し得ない基本的な営み、(4) 日常生活空間に充満しているもの、として位置づけた。

村田 (1968) や村井 (1970) によれば、会話とは、自分自身の要求や経験を相手に伝達するだけでなく、相手を意識して伝達しようとする内容をできうる限り効果的に調整し、また相手のそれらを理解して言語的に応答することであり、すなわち相手の立場を尊重し、相手を理解しながら応待する活動であるといえる。内田 (1982) によると、会話のもつ役割は「他者との言葉による意図的な一連のやりとりで、言葉により共同で何かをしていくこと」とされる。

会話が成立するためには、相手が必要としている内容に適応した文脈情報に注意を向けることが求めら

れ、文脈情報の共有によって会話が維持される。それは、仲間同士の関係にある話し手と聞き手が大枠の文脈で共有された仮定をもっていることが前提にあり、相互に相手の発話意図を文脈と合わせながら解釈していくことが必要である。自分の意図に合わない発話や文脈情報を無視して、自分自身の意図のみで言動すると会話は維持されない (秦野, 1998)。

また、会話の成立には参加者間のテーマ共有が重要な要因となる。お互い言語交換を行うものの、それぞれが全く異なるテーマで発話を進めていては、共通の情報は保持されない。乳幼児期において共通情報の保持には2つの段階があると考えられる。第1に、共通イメージ保持段階、すなわち相互間における心像 (心に思い浮かべる像) の保持、第2に、共通テーマ保持段階、共通の話題性 (談話の題材である一連の話の内容、話の主題となる事柄) の保持が可能となる段階である (山本, 2003)。

### (2) 媒介物要因からみた子ども同士の会話

Piaget (1923) は、幼稚園における連続的作業を行っている約20人の自由な会話を観察し、自己中心的言語や独言等も発話の範囲に含めた会話の水準にまで達していない集合的独言を基点として幼児間の会話を幾つかの段階で評定した (Fig.1参照)。集合的独語の時期を会話の準備段階として段階 I (3-5歳頃) を位置づけ、自己中心的思考の性質を残し、自己中心的な範囲における応答が生じる会話の萌芽期 (*un embryon de conversation*) とした。さらに会話本来の特質および社会的言語の特質をもつ段階であり、ある特定の行為が会話の主題となる非抽象的思考に基づく会話を特徴とする段階 II (4.5歳-7歳頃) を位置づけた。段階 II はさらに、二つの型式に分類される。第一型式として「自分の見地から話す相手が相手に聞かれてもいるし理解もされ、他のものの行為と連合している会話」を位置づけた。それは自分ことだけ、自分の行為や自分の思考だけを話すためにまだ普通の活動における協同がない状態である。さらに第二型式は「話し手による行為、あるいはその行為と関連する思考 (非抽象的思考) において協同している会話」と位置づけ、ここでの会話の主題は、話し手同士が分担し為しつつある特定の行為とされた。また段階 III (7,8歳頃-) は、その時の活動と連合しないが、説明を発見したり物語やあるいは記憶を再構成したり、できごとの順序ある

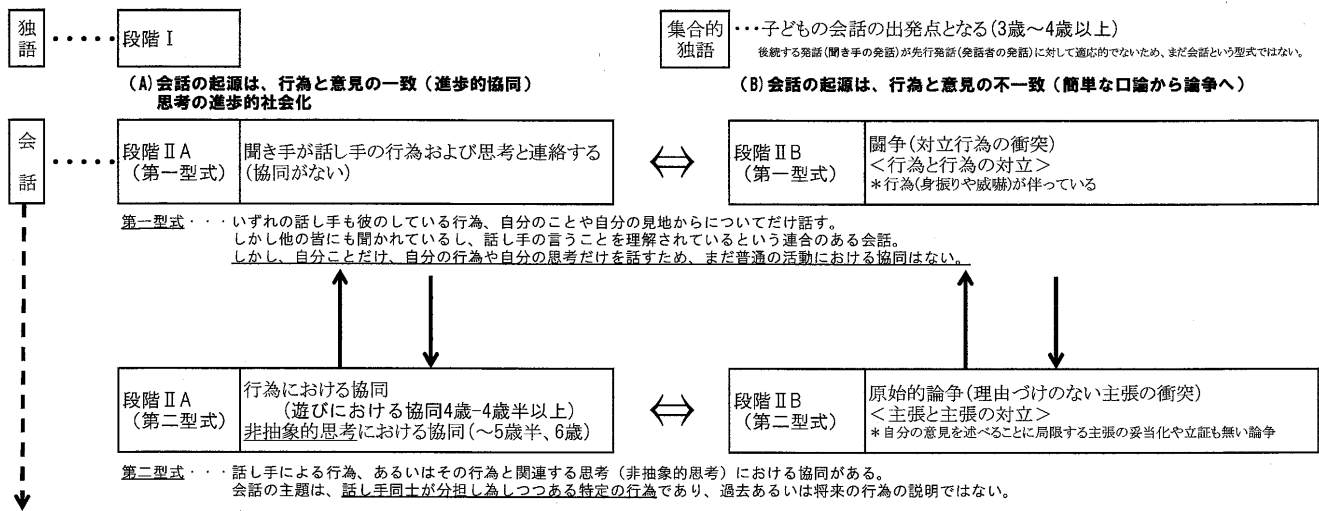


Figure 1 幼児間の会話における段階評定(Piaget,1923,1954をもとに山本が改表)

いは話の真否を討議したりすることに関連する「抽象的思考における協同」と位置づけられた。

Piagetの研究より、幼児期は非抽象的思考における協同に至るまでの段階といえよう。また当該研究では、連続的作業を行っている幼児を対象としており、その意味では6歳頃までは媒介物を介してコミュニケーションが進行するといえる。

### (3) 適応性要因からみた子ども同士の会話

木下(1987)は、既に2歳児より聞き手からのフィードバックに応じて伝達手段の調整を行うことを明らかにした。聞き手が言語的なフィードバックを返すことは被験児に伝達の相手を意識させ伝達のための文脈に引き入れていわゆる「足場をつくる(Scaffolding)」効果があるとした。また1歳前半から1歳後半の乳幼児は、聞き手からの言葉かけがあっても伝達手段の調整をできない段階、聞き手からの言葉かけがあって伝達手段の調整が可能になる段階、1人でも伝達手段の調整が可能という過程を辿るとした。

2歳から5歳までの発話内容を各年齢群で比較をした山本(2001,2002)では、相手との交流を意図していない発話と位置づけた「非相互作用発話(Non-interactive Utterance)」が中心となる会話特徴から、相手との交流を意図し相手との行動を期待する発話と位置づけた「相互作用発話(Interactive Utterance)」が中心となる会話特徴へと4歳台を境に変化することを明らかにした。特に非相互作用発話が多かった2,3歳では、発話者の発話内容に応じた返答が少なく、その要因として、①受け手が発話者とは

別のイメージを持って発話を進めてしまう点、②発話者の発話内容が説明不十分であり受け手が発話意図を捉えにくい点、③2者間で共通のイメージを保持しにくい点が要因として考えられた。また、5歳台では共通のテーマに添った相互作用発話が多く観察され、発話者の発話内容に応じた返答が可能であり、相互間で同じ話題に基づいて会話が進行された。会話が進行する要因として、①聞き手の反応を受けて相手の理解を援助する発話の修正を行う点、②そのために話し相手の意図を聞き手が捉えやすい点、③そして相互間で共通のイメージ保持、また共通のテーマ保持が可能である点などが要因として考えられた。

その意味においては、横山(1980)の言うように、2,3歳は文脈の調整というよりも、双方がコミュニケーションを必要とし、その限りでコミュニケーションを成り立たせようとする意志が何らかの形で成立しているという意味で、まさに「コミュニケーションの場」の調整である。

またこの時期以降、同輩幼児間では知識や情報が、その交渉によって伝達され、それぞれの必要性が認められる場合としての「コミュニケーションの成立」へ向かっていると考えられる。

### (4) 本研究の目的

本研究の目的は2点ある。

第一の視点として、山本(2001,2002)で規定された「非相互作用発話<sup>(2)</sup>」の再検討である。山本(2001,2002)では、2歳から6歳までの子ども同士の会話を分析し、発話交換の相互作用率を明らかにする

(2) 「非相互作用的・相互作用的発話」

山本(2001,2002)で位置づけた「非相互作用的発話(Non-interactive Utterance)」と「相互作用発話(Interactive Utterance)」は、江口(1974)の研究を参考にして提起された。江口(1974)によると、相手に対して表現・伝達の意図をもつ発話を「伝達発話(Communicative Utterance)」、相手に表現・伝達の意図をもたない発話を「非伝達発話(Noncommunicative Utterance)」として分類されている。

ため、子どもが発する発話の中で、相手との相互作用の無い発話を「非相互作用発話」と提起した。しかし、その後の山本の研究(2004 a, 2004 b, 2006 a, 2006 b)において、①同輩幼児間の社会的行動を前提とした視点から研究に着手していること、②子ども同士のやりとりにおいて、幼児間で交流しようとする何らかの努力は垣間見られることなどを確認してきた。その結果、相互作用が無いという判断から「非相互作用発話」という名称は不適切であると考えられた。これらの検討をふまえて、本研究では「非相互作用発話」とされていたものを、会話成立に至らないまでも相互作用に向かう過程にある発話として「準相互作用発話 (Semi-interactive Utterance)」と位置づけ、山本 (2003) による同一の観察対象を用いて再度分析を行うこととする。

第二の視点として、「幼児間の会話発生期」<sup>(3)</sup>と位置づけられた2歳後半頃から、「幼児間の会話発達における質的転換期」<sup>(4)</sup>として抽出された4歳台までを対象とし、幼児間における会話の自然発生過程を質的に分析することである。

## 方法

(1) 観察場所 京都市内 K 保育園 (保育室の一室、以下観察室とする。)

(2) 観察期間 2002年7月～10月

### (3) 観察手続き

観察はおやつ後、午後3時半から5時半頃に実施した。筆者 (観察者) は K 保育園5年以上の参加観察者であり、幼児とのラポール形成はされていたと考えられる。予め予備観察または保育士や児への聴き取りにより、幼児の仲間関係を把握した上で観察時の対象ペアを選定している。おやつ時にその日の対象児に観察

の旨を伝え、観察室<sup>(5)</sup>へ誘いかけた。なお、2歳児クラスの対象児は、保育士に誘いかけて援助してもらった。幼児ペアを観察室に招き、机に向かい合わせた幼児用の椅子に対座してもらう。机には何も提示しない。全クラスの観察ペアに「しばらくお話しして待っていてね」と教示を与え、2児を残して観察者は退室し、対象児の安全面の確認も含めて、幼児の様子をガラス窓付きの扉から観察した (Fig.2参照)。

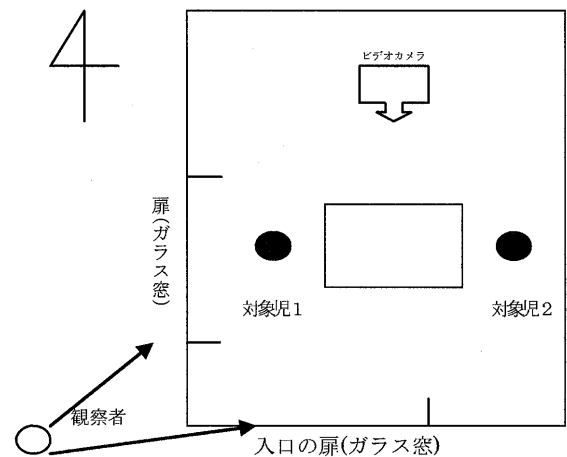


Figure2 観察場所の配置図

記録はビデオカメラ (SONY CCD-TRV80PK) に行った。約10分の観察後に観察者が部屋に入室し、観察終了とした。

### (4) 観察対象

幼児の観察への参加は研究の倫理条項を遵守し<sup>(6)</sup>、観察者が対象児へ誘いかけた際、必ず事前に児の意思を確認した。その際、拒否した児に関しては観察を強要しなかった。また観察不可能であった児 (お迎えや体調不良などの観察途中退室児や休園児、途中降園児など) に関しては、比較的仲のよいと思われる幼児に依頼し、他の重複児で観察を補った。そのため、一人の幼児が重複して他の数名の幼児とペアを組んでいる

(3) 「幼児間の会話発生期」

山本 (2000) は、通常2歳後半頃から、子ども同士で言語的コミュニケーションが可能となり始めることを明らかにし、この時期を「幼児間の会話発生期」と位置づけた。

(4) 「幼児間の会話発達における質的転換期」

山本 (2001) では、非相互作用発話から相互作用発話へと移行した4歳台を、幼児間での相互伝達が可能となるという点で「幼児間の会話発達における質的転換期」と位置づけた。

(5) 観察室

観察室は、通常1歳児の午睡や延長保育など、多目的に使用されている保育室である。今回の観察幼児たちにとって、この部屋は「小さい子が使っている部屋」もしくは「延長保育の部屋」として認識されている。

観察室の間取りは Fig.2 の通りである。部屋の大きさは 4.7 m × 1.8 m (窓は北側と西側に一つずつ、床はコルク材質、天井には首が固定・無回転の扇風機) であり、畳8畳分のこじんまりした小さな部屋である。

(6) 幼児期初期 (主に2歳児) の観察について

本研究では、観察の開始対象年齢として2歳児を取り上げ、限定した観察室での観察を行った。特に2歳児は場面の切り替えに不安や緊張を抱くことがあり、また観察者との信頼関係の形成などが必要となる時期である。したがって、観察場面へのスムーズな導入に対して困難が生じる場合も考えられた。そこで本研究では、観察以前に子どもたちとのラポール形成にあたる目的として、筆者が数週間保育に参加した。またラポール形成とともに対象児の意思を尊重し、事前に拒否の意思表示をした児に関しては観察を中止した。

観察実施にあたり、主に「日本発達心理学会の倫理条項」を参考とし、他に「日本教育心理学会倫理綱領」、「サイコロジストのための倫理綱領および行動規範」を参考にした。

場合もある。

その結果、以下の観察対象が抽出された。

- ・ 2歳児クラス12名 (CA2:8 ~ 3:5, Mean2:10, SD2.56, 男6 : 女6) 幼児ペア9組
- ・ 3歳児クラス16名 (CA3:6 ~ 4:5, Mean4:2, SD2.90, 男10 : 女6) 幼児ペア7組
- ・ 4歳児クラス17名 (CA4:2 ~ 5:0, Mean4:8, SD3.22, 男14 : 女3) 幼児ペア10組
- ・ 5歳児クラス14名 (CA5:4 ~ 6:4, Mean5:11, SD3.65, 男10 : 女4) 幼児ペア9組

観察した幼児ペアは35組、幼児数は計59名であった。

## 結果

### 1. 量的分析

#### (1) 発話内容の分類

分析にあたり、ビデオ記録した子どもの発話をビデオ視聴しながら転記し、会話の様子も含めてそれぞれの幼児ペアごとに文字化した。

さらに観察された発話のうち、言語的相互交流の成立にいたるまでの発話を準相互作用的発話（以下、SUとする）として分類した。

SUは、相手に伝える意思が明確にみられない発話や相手の発話に無関係あるいは無関心な発話であると定義される。例えば、相手の反応を期待しないかのような「叙述」や、歌、独言（自己活動の叙述、感情表現）などはここに含めた。SUの例をTable1に示す。

Table 1 準相互作用的発話(Semi-interactive Utterance)の種類

分類基準	発話例
(1)場面・状況に対する叙述…… (外への関心も含む)	Ex.「(先生)どこ行ったのかな?」(3歳) 「(部屋の戸)開けたらだめだよ」(4歳)
(2)自己活動への集中の時の独言 (相手に伝える意思の無いお話)	Ex.「ウルトラマンが来てな」(4歳) 「ネコちゃんがお散歩行ってな」(2歳)
(3)感情表現の独言……	Ex.「(扇風機を見て)わあ、涼しいなあ」(4歳)
(4)自分の要求を通すための依頼……	Ex.「トイレ行きたいし、先生呼んできてよ」(5歳)

次に、相手と相互に共同しようとする発話、また

言語交流を通じて相手に情報を伝達しようとする発話、お互いの交流を行う意図がみられ相手の発話内容に適応した発話を相互作用的発話 (Interactional Utterance. 以下、IUとする)として分類した。相手と交流しようとする意思のある教示や説明、勧誘や提案、質問や相手に対する応答などはここに含めた。IUの例をTable 2に示す。

Table 2 相互作用的発話(Interactional Utterance)の種類

分類基準	発話例
(1)情報伝達(教示・説明も含む)……	Ex.「僕な、お休みの時、お猿見に行ったで」(6歳)
(2)協同活動(勧誘・提案も含む)……	Ex.「あっ、そうだ。明日の天気どうかな?ってお話しょ」(4歳)
(3)質問(会話になり得る発話)……	Ex.「なあ、仮面ライダーアギト(TV番組)逮捕されたん知ってる?」(5歳)

#### (2) 分類における評定者間の一致

発話内容の分類にあたり、観察の信頼性を保障するために複数で観察し、その結果の一致の程度を検討した。観察対象のうち、乱数表を使用することで各年齢群ペア一組ずつ計4組をランダムに抽出し、それら4組を評定対象とした。評定の際、筆者ともう一人別の評定者（心理学研究法を学んだ院生）によって評定を行った。また先入観を排すため対象児の月齢等は通知せず、評定を行った。

各評定者は、評定対象となるペアのビデオ記録（各年齢群数×ペア数）を視聴しながら、記録用紙に観察された発話をSU、IUに分類した。1回目の評定では、まず筆者からSU、IUの分類基準を評定者に説明し、一度ビデオを観ながら評定を行ってもらった。評定は2回実施し、1回目の評定後、不一致となった発話に関しては分類基準の補足説明を行い、両者で不一致となった原因の検討を行った。さらに2回目は分類基準への影響（映像視聴による発話以外の動作等を考慮に入れてしまうため）を除外するために、ビデオ視聴は行わず転記されたプロトコル記録（会話内容のみが転記されているもの）のみで分類の評定を行った。

一致度算出は、複数者の観察一致度において偶然の一致が混入する可能性を避けるため、単純な一致

(7) Cohen のカッパー係数

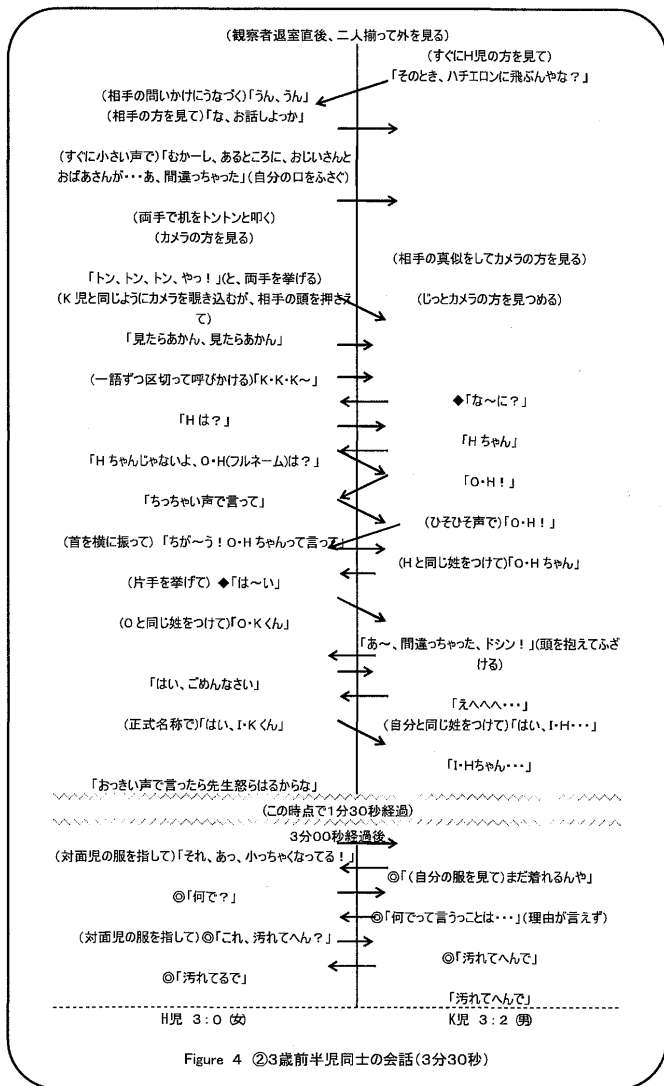
$$\kappa = (p_o - p_e) / (1 - p_e)$$

p<sub>o</sub> は一致率、p<sub>e</sub> は偶然の一致率である。p<sub>o</sub> > p<sub>e</sub> なら κ は正の値をとり、その逆なら負の値をとる。完全な一致の場合は 1 となる。κ が .81 ~ 1.00 はほぼ完全な一致、.61 ~ .80 は実質的に一致しているとみなされる (Landis & Koch, 1977)。.75 以上であれば、満足できる一致率である (Freiss, Cohen, & Everitt, 1969)。



H児とK児の場合、1分30秒間でのやりとりでは、相手と同じ発語の繰り返しによるやりとりを行うなど、会話例①と同じような特徴が見られた。会話開始の手がかりは提示された（「お話ししよっか？」H児）が、まだ共通のテーマに基づく言語交流ではなく、共通の話題に実物を介した媒介物のある会話である。

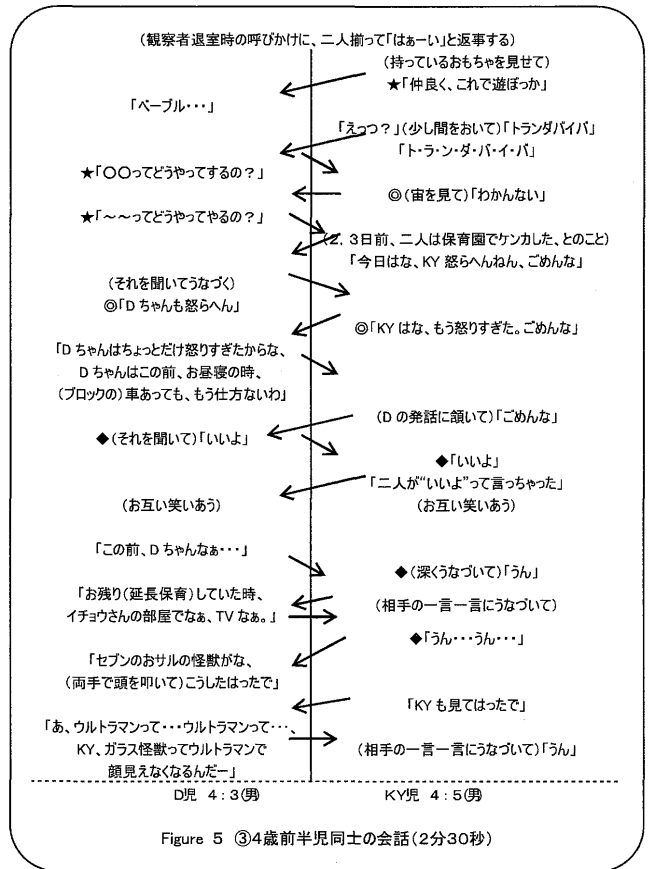
しかし、会話例①とは異なり3分経過後には、相手の衣服を媒介物（共有情報）にして相手の発話に応じた適切な返答を行っている姿が見られた。その意味において、3歳前半児同士は、共有情報として眼前にある事物を媒介すれば、相手の発話に応じた返答を行うことが可能であるといえる。



### (3) 会話例③ [4:3,4:5男児] (Fig.5)

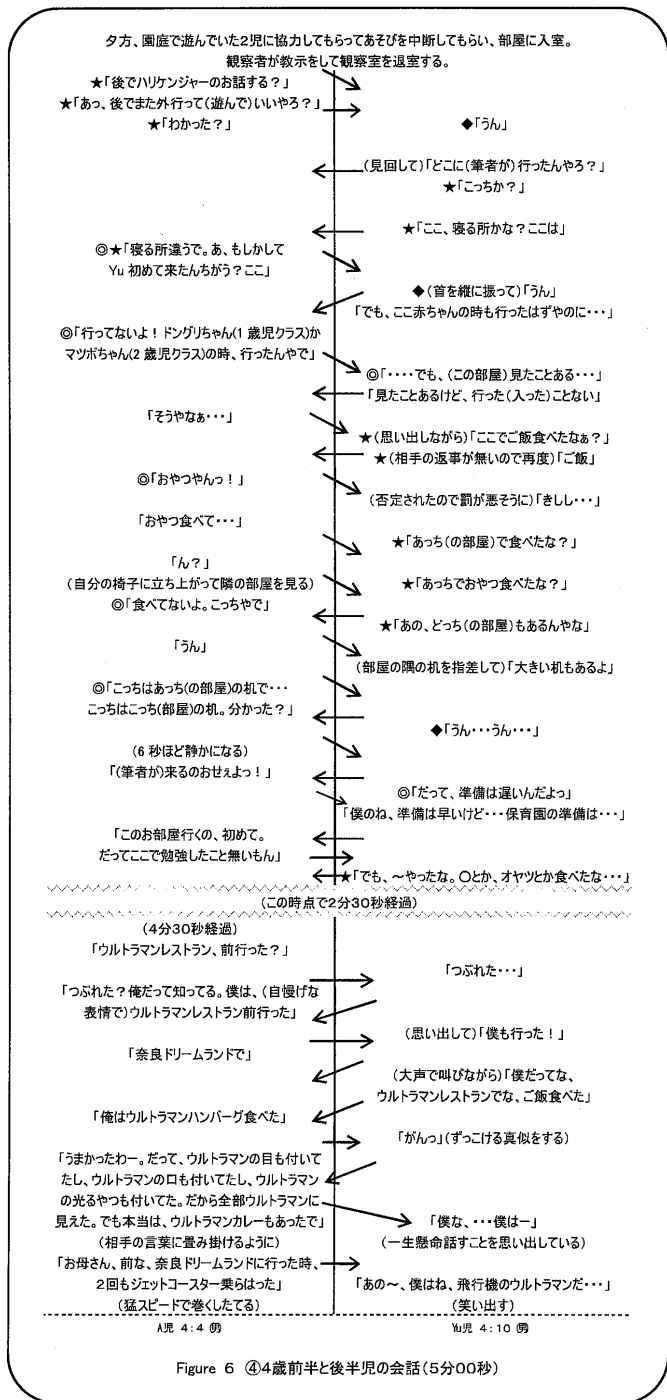
4歳以降になると媒介物を介さなくても言語のみによる発話交換が可能となり、4歳以降の幼児間では事物を媒介しなくとも言語交流が成立し始める。4歳前半児ペアでは、数日前にお互い共有体験した出来事(ケンカ)を想起し、それぞれが自己活動を捉え直しお互

い伝え合うという会話内容であった。また会話主題は、日常性の高い主題であり、相手との関係で生じた数日前の出来事を想起し、自己の活動に対する意思表示を行うなど、共通の話題共有ができて始める。



### (4) 会話例④ [4:4,4:10男児] (Fig.6)

2分30秒までは2児が居る部屋を共有情報にして、その部屋に関するそれぞれの経験を想起しつつ言語交流が進められている。自己経験が会話テーマとして用いられるようになり、自分の家族、旅行先の経験など自己の経験が提出される。発話交換の形態としては、応答以上（発話者への返答+相手への質問）の発話交換数も増加した。また4分30秒経過すると、日常性の高い主題（園生活や家族との体験など）ではあるものの、眼前の事物を共有情報にしなくても会話が進行しており、相互の体験を出し合いながら、「楽しかった思い出」という共通の文脈を産出するようになる。



## 考察

量的分析によると、準相互作用的発話が多かった2、3歳群では言語的相互交流が成立したとは言えない状態であるが、質的分析からコミュニケーションの場を維持しようとしていることが分かる。

2、3歳は、発達的に相手の意図と自分の意図との調整を行い、自分の意図を押し出しつつも相手の意図にも気づき始める。相手の動作を取り入れることによって相手の世界と自分の世界を相対的に分化させていく。その行動のもとには主人公となる自我が存在し「自分が伝えたい」という思いから、3歳以降、友だちの

活動に目を向ける余裕が芽生え始める。特に、会話成立に必要な「イメージの共有」は、本結果の2、3歳児で見られたように、ふざけあったり笑いあったりなどの楽しい体験をともに共有することにより生まれ出ているのだと考えられる。

量的分析で相互作用的発話が多かった5歳児は、言語的相互交流が成立する時期といえる。その移行期間として抽出された4歳児の質的分析によると、相手が理解可能になるという意味において適切な言語説明ではなく不十分な言語提示であった。しかし、2、3歳群と比べて幼児間の会話進行に媒介物の果たす役割は減少した。つまり、両者が眼前の事物を介さずに同一のイメージを共有することができ、同一経験をしていない相手に対しても発話交換が維持され、持続性のある会話が成立し始めたといえる。また会話内容において過去の経験の語りなど時間的文脈が含まれるようになり、文脈における発話解釈能力が獲得され始めている。

発達的には、4歳以降、重さや数など目に見えない世界を比べる力が育ち、ことばを用いて現時点の世界を離れ、「もし～～だったら」という仮定の世界や経験したことを言語表現していくようになる。また、自分のつもりと相手のつもりの間で調整を行い、役割交代やイメージを共有した遊びができるようになる。

これまで、遊びの活動における幼児間の相互伝達行動の研究(江口,1974;木下ら,1986;内田,1982など)が為されてきたが、本研究結果では、遊び活動での遊具という事物が媒介されなくても幼児間での言語交流が2歳後半頃から為されていた。その意味において、子どもたちは、ともに関わりあう中で相手の気持ちを受け止め、自分の気持ちを伝えるなど、共感しあう関係を深め、子どもたち同士の世界をさらに広げていく可能性を秘めている。また、コミュニケーション研究というアプローチにおいて発話プロトコルを分析していくと、一見無意味と思われる言語現象の中に、人間関係や共同行為が存在することを確認することができるのである。

## 参考文献

- ・アメリカ心理学会(編) 富田正利・深澤道子(訳)(1996) サイコロジストのための倫理綱領および行動規範 日本心理

- 学会 (American Psychological Association (1992) Ethical principles of psychologists and code of conduct. *American Psychologist*, 47, 1597-1411.)
- ・ 江口純代 (1974) 幼児のコミュニケーション行動の発達 - 遊び場面における2幼児間の相互的言語伝達の分析 - 人文論究, 34, 15-38.
  - ・ Freiss, J.L., Cohen, J. & Everitt, B.S. (1969) Large sample standard errors of kappa and weighted kappa. *Psychological Bulletin*, 72 323-327.
  - ・ フリック, U. 小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子(訳) (2002) 質的研究入門 - <人間の科学>のための方法論 - 春秋社 (Flick, U. (1995) *Qualitative forschung*. Hamburg: Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH.)
  - ・ Garvey, C. (1984) *Children's talk. The developing child*. England: William Colloms Sons Co.Ltd. (ガーヴェイ, C. 柏木恵子・日笠摩子(訳) 子どもの会話 - “おしゃべり” にみるこころの世界 - サイエンス社)
  - ・ 秦野悦子 (1998) 第6章: 会話が成立するときしなるとき (秦野悦子・やまだようこ(編) コミュニケーションという謎 ミネルヴァ書房 pp.129-146)
  - ・ 秦野悦子 (編) (2001) ことばの発達入門 大修館
  - ・ 木下孝司 (1987) 乳幼児における要求伝達手段の調整過程 - 聞き手からのフィードバックとの関連で - 教育心理学研究, 8, 351-356.
  - ・ 木下芳子・朝生あけみ・斎藤こずゑ (1986) 幼児期の仲間同士の相互交渉と社会的能力の発達 - 3歳児におけるいざこざの発生と解決 - 埼玉大学紀要教育学部 (教育科学), 35, 1-15.
  - ・ 倉持清美 (1992) 幼稚園のものをめぐる子ども同士のいざこざ - いざこざで使用される方略と子ども同士の関係 発達心理学研究, 3 (1), 1-8.
  - ・ 倉持清美 (2003) 保育用語辞典第二版 ミネルヴァ書房
  - ・ Landis, J.R. & Koch, G.G. (1977) The measurement of observer agreement for categorical date. *Biometrics*, 33, 159-174.
  - ・ 松永あけみ 宍戸健夫ほか (監修) (2006) 保育小辞典 大月書店
  - ・ 箕浦康子 (編) (1999) フィールドワークの技法と実際 - マイクロ・エスノグラフィー入門 - ミネルヴァ書房
  - ・ 村井潤一 (1970) 言語機能の形成と発達 風間書房 p.163
  - ・ 村田孝次 (1968) 幼児の言語発達 培風館
  - ・ 無藤隆・内田伸子 (1982) 幼児初期の子どもはいざこざの発生と解消 教育心理学会第24回総会論文集, 352-353.
  - ・ 日本発達心理学会 (監修) (2000) 心理学・倫理ガイドブック
  - 有斐閣
  - ・ Piaget, J. (1923) *Le langage et la pensée chez l'enfant*. Neuchâtel-Paris: Delachaux&Niestlé pp.79-95, pp.125-127 (Piaget, J. 大伴茂(訳) (1954) 臨床児童心理学1 児童の自己中心性 pp.117-150)
  - ・ Sacks, H., Schegloff, E.A. & G. Jefferson (1974) A simplest systematics for the organization of turn-taking in conversation. *Language*, 50, 696-735.
  - ・ 内田伸子・無藤隆 (1982) 幼児初期の遊びにおける会話の構造 お茶の水女子大学人文科学紀要, 35, 81-122.
  - ・ 山本弥栄子 (2000) 幼児期初期における言語的コミュニケーションの発生過程 龍谷大学文学研究科教育学専攻修士論文
  - ・ 山本弥栄子 (2001) 幼児間の会話発達に関する研究 (2) - 3, 4歳台における会話の特徴分析 - 第68回日本応用心理学会発表論文集, p.40
  - ・ 山本弥栄子 (2002) 幼児間の会話形態の発達の容変容 - 参加人数・媒介物の有無・応答形態による分析 - 龍谷大学教育学会紀要, 1, 17-37.
  - ・ 山本弥栄子 (2003) 同輩幼児間の言語的コミュニケーション (会話) に関する研究 - 2歳から6歳までの各年齢群の比較分析から - 佛光大学教育学部学会紀要, 2, 201-220.
  - ・ 山本弥栄子 (2004 a) 幼児間の会話発達に関する研究 (7) - 限定された空間における同輩幼児2児の Communication - 第15回日本発達心理学会大会論文集, p.61
  - ・ 山本弥栄子 (2004 b) 幼児間の会話発達に関する研究 (8) - 同輩幼児間における会話の質的変化と教育的課題 - 第71回日本応用心理学会大会論文集, p.81
  - ・ 山本弥栄子 (2006 a) 幼児間の会話発達に関する研究 (9) - 会話発生期におけるコミュニケーション - 第73回日本応用心理学会大会論文集, p.75
  - ・ 山本弥栄子 (2006 b) 幼児間の会話発達に関する研究 (10) - 会話成立期におけるコミュニケーション - 第16回日本乳幼児教育学会大会論文集, 94-95
  - ・ 横山明 (1980) 子どもの言語伝達行動にはどんな特徴があるか (横山明・高垣忠一郎編 小学生の発達と教育 三和書房 pp. 102-137)
  - ・ 好井裕明 (1999) 会話分析への招待 世界思想社

## 謝 辞

小論は、平成14年度山内慶華財団の援助による研究成果の一部です。執筆にあたり、この場をかりて関係者に甚深の謝意を表します。また会話のデータ収集にあたり、京都市風の子保育園の先生方ならびに園児の皆さんにご協力戴きましたことを深く感謝申し上げます。最後に、一致率の評定に関してご協力戴きました龍谷大学文学研究科教育学専攻修士課程の加藤紀子氏（2003年度修了生）に感謝いたします。

(やまもと やえこ 本学講師)